

## おんしや

桑原 正紀

吉川宏志の歌集『雪の偶像』に次のような歌がある。

隣室に「おんしや」「おんしや」と面接の練習しつつ  
籠もる娘は

WE B 面接に顔をさらしている娘 幾百の顔と比べら  
るるや

説明するまでもないと思うが「おんしや」は「御社」、すなわち採用試験面接を受ける会社を敬った言い方。それを連呼しているような表現になっているが、実際は志望動機を述べている一連の言葉の中で、「御社」という部分が突出して印象強く伝わってきたことを表現したのだと思われる。つまり、吉川には「御社」という言葉が違和感を伴うものとして響いてきたのだ。娘さんの方もいくら若いとはいえ、WE B 面接には不慣れで緊張を強いられたことだらう。使い慣れない「御社」という言葉をとりわけ注意して復唱しているような様子も感じ取れる。

私も教員時代に採用試験の面接官を担当したことがあつ

て、いつの頃からか「おんこう」という言葉が応募者から聞かれるようになり、違和感を覚えたことがあつた。「おんこう」がすぐ「御校」につながらなかつたのだ。

この敬意を表す「御(み・ご)ぎよ・おん・おおん)」は古くから使われていたが、現代の話し言葉では「お」になるのが普通である。「お礼もうしあげます」のように。これを「おん礼もうしあげます」と言うと、ものすごく畏まった感じになる。

それではこの「おんしや」「おんこう」が使われるようになる以前はどのように言っていたのだろうか。これに該当する言い方は、特別な敬意のこもらない「こちらの会社(学校)」などであつたように記憶する。文書などでは「貴社(校)」とは書いたが、話し言葉ではどちらも不自然という感覚が一般的だつたはずである。会社や学校は建物、組織であつて、ふつうは敬意の対象にならない。ただ、かつて例外的に神や天皇、貴人を背後に意識した時はその対象となつたので、「御社(校)」などと言うと急に時代がかつた言葉として感じられるのだ。

「わが社」をいつのまにか「弊社」と言うようになったことにも違和感がある。こうした現象の背後には敬語表現の混乱から生じる不安があると思つている。混乱すると不足するのが心配で、過剰気味の方がまだ安心という心理だ。「御御御つけ」の発生もそれだろうか。